

資 料

ジュフロワ・アーケード通り¹⁾

— 「パリ歴史散策」(8) —

ジ ョ ル ジ ュ ・ カ ン 著
金 柿 宏 典* 訳注

1829年8月8日土曜日、真夜中頃、善良なパリ市民たちは、——息苦しい暑さのため——掻き氷を作ったり、新鮮なレモネードをモンマルトル大通り²⁾のカフェのテラスで飲んだりしていたが、広い歩道を野次馬で一杯になるのを見て大変驚いたのである。しかもその数は刻一刻と増加していった... 群衆は特に10番地の家の前に集ってきた。散策者たちには良く知られていた六階建のこの館は、多くの音楽家や演劇関係者が住んでいるので、「芸術家の家」Boîte des Artistesと呼ばれていた³⁾。今日のジュフロワ・アーケード通りである。

女性たちは舞台衣裳を、オーガンディ製の白衣や刺繍され「うすいサテン」Satin Vapeurで裏打ちされたインド・モスリンのオーバーを着ていた。ほとんどすべての女性が褌のついたバチスト白麻上布のケープかガーゼ製の、桜色か白色のスカーフを纏っていた。帽子は本物の花束や金鎖や額を飾る真珠の鎖で飾られていた。彼女たちの櫛は高級品のべっ甲だった。

男たちは、オペラハットを被り、「略式の夜会服」demi-soiréeの服、緑の銀梅花色の服をこれみよがしに着ていたが、それは「烏の目」oeil de corbeauつまり空色で、錦織模様のさまざまな陰影をつくる絹のチョッキの上で大きく前を開いているものだった。長ズボンは白いカシミアである。ヴェネチア風の一種の外套を肩は羽織っていた。(図版A)

* 福岡大学名誉教授

オペラ座から出て来たようなすべての人々は、実際オペラ座帰りなのだが、時々刻々と増加する群衆の中に苦勞して道を切り開いた。有名な個人用馬車、特別行事用の四輪馬車、二輪馬車、広場の一頭立の二輪馬車が道路を占領していた。夜会服を着た美しい夫人方がよりよく見るために馭者の席に坐っていた。「小柄な馬丁」les tigresは立ち上って手綱を短く持ち、鉄のくつわを揺らしている馬を制御していた。秘密を知らない連中は不安気に互いに尋ね合っていた。目を丸くして、物見高い群衆は近寄って言葉を交わしていた。—— そしていつの時代でも物見高い群衆はパりに多いのかは神のみぞ知る！ 何が起るのか？ 何があるのか？... (図版 B)

間もなく、好奇心が倍加されたのは、ドルオ街⁵⁾ —— グランジュ・バトリエール街⁵⁾とも呼ばれていた —— から、身なりの良い男の団が、緑色のサージの布と黒い箱にかくされた奇妙な形の荷物を持って入って来たからである。この新参者たちは10番地の前に集合し、サージの布をとき、箱をあけて、そこからチェロ、トロンボーン、コルネット、ハーブ、ヴァイオリンなどの楽器を取り出したのである... どうにかこうにか、やっとのことで、彼らは道路や歩道に座を占め、「ラ... ラ... ラ...」と調音し始めた。オーケストラの指揮者アブネック⁶⁾が登場する。群衆は拍手をし、事態を理解した。オペラ座が、「ウイリアム・テル」*Guillaume Tell*⁷⁾の作者で光輝ある巨匠ジャコモ・ロッシーニ⁸⁾を祝福しようとしたのである。その作品の初演は五日前に王立音楽アカデミーの舞台で行われ、万雷の拍手を浴びたのである。ロッシーニはこの有名な「10番地」の三階に住んでいた。オーケストラ、芸術家、オペラ座の観客たちは、彼に敬意を示す家の前での演奏オーバードを奏したのである。甘美な星空の夜、この着想は新鮮で魅力的だった。喜び感謝したパリは「ベサロ⁹⁾の白鳥」*Cygne de Pesaro*の栄光を賛美しようとしたのである。アブネックの合図で —— 中国風の巨大な影がまばゆい光の商店の上にくっきりと浮かび上り —— オーケストラは「ウイリアム・テル」の前奏曲を演奏した。人々の拍手はガラス窓を震動させ、ダバディ¹⁰⁾、ヌーリ¹¹⁾、ルヴァスール¹²⁾、この作品の輝かしい三人の歌手が「誓い」*Serment*の有名な三重唱を歌い出した時、熱狂は絶頂に達したのである。次は正に時宜にかなったカンタータ¹³⁾の番だった。—— なんとというカンタータ！ —— 翌日パリを去らねばならない巨匠の名誉のため「一人のアマチュア」が作曲したものなのだ！

故郷の空は、ああ！

私たちの風土にあなたがいるのを羨む
 あなたは私たちから去るが、あなたの天才は
 私たちから去ることはない。

… …

あらゆる窓に見物人が鈴生りだった。各人が拍手し、喚声をあげていた。ただアパートのみが頑なに闇の中だった。この祭典の主人公の部屋が。ロッシーニは礼讃の祝祭に参加しないのだろうか。その理由はすぐ判明した。滑稽極まりない理由だった。警察は秩序を確保しようと大至急に態勢を整え、群衆が大通りに侵入するのを防止するためアパートに近づく道路を封鎖しなければならなかった。このバリケードにより押し戻された群衆の中に、一人の男が人々に通してほしいと嘆願し、警官の独裁的態度をみて怒り狂い、大きく身振り手振りをして奮闘していた… これこそロッシーニ本人だったのである。彼は叫んだが無駄だった。「私がロッシーニだ、私がいなければ始まれんぞ、通してくれたまえ」、警官たちは異口同音に答えた。「貴方がロッシーニですと、冗談もいい加減にしてくれたまえ、もう何度も我々に同じことを言った連中がいるんですけど… もううんざりしてるんだ、静かにしないと、交番に連行するぞ！」この巨匠が立入禁止区域に押し入るのに協力し、この人気者を彼の賛美者たちの熱狂した群衆に返すために、警察上層部の命令が必要だったのである。（図版 C）

*
 **

（この土地の地主の名である）ジュフロワ通りになる前に、モンマルトル大通りのこの10番地は、既に何度も変更を遂げてきた。18世紀末、ここはクロザ館¹⁴の野菜畑の飛び地で、館の庭はテラスになっていて、通りの反対側、即ち大通りに広がっていた。ここで狩をした律儀なデュパンおやじに言わせると、1805年、「ここは野原だった」との事である。事実、1810年頃まで、大通りはパリ市外の、いわば延長にすぎず、この市外地で野菜農家がキャベツ畑や葡萄畑をつくっており、グランジュニ・バトリエールの沼沢地の近くでは、馬や豚の群が放牧されていた。地平線にはモンマルトルの風車が廻っていた。

1820年頃、モンマルトル大通りは人口が増加する。多くの芸術家たちがそこに住みつく。マルス嬢¹⁵⁾、ヴァリエテ座¹⁶⁾のお馴染みの役者ブリユネ¹⁷⁾、アルナル¹⁸⁾、ギリア・グリジ¹⁹⁾、アルフォンス・カール²⁰⁾、音楽家のアルベール・グリザール²¹⁾らである。そして10番地の建物はトルコ大使館つぎにロシアの親王テュフィアキンの館になった後、有名な「斜頸」*torticolis*の大金持ちの貴族が、1829年にこの建物に住んだ事は「芸術家の家」で述べた通りである。ロッシーニ、ボワルディユー²²⁾、カラファがここに住んでいた。[原注：ロベールのピロードに似せた壁紙工場は、マルス嬢が住んでいた家の近くだった(図版D)]

ロッシーニとカラファは、この時期、昔はトルコ大使館やテュフィアキン親王の館だったボワルディユーの住宅の中に自分たちの部屋を所有していた。

このロシア親王は、ルイ・フィリップ治世下では、秘書としてジョルジュ氏を備っており、彼はほとんど至る所に親王と同行し、車には向い合って坐っていた。

病弱のため、テュフィアキンは頭を右肩の上にひどく傾けていた。彼の秘書は、親王と話をするために首を伸ばさざるを得ず、おそらくへつらいのためか、向い合って同じように首を曲げていたのである。彼の肩は頭にクッションの役をした。二人が並んで歩く時、ジョルジュ氏の右手は親王の左手を支えるので、二人は話せなかった。向きを交える時、二人の頭がぶっかるので、通行人の笑いを誘った。

ジュフロワ通りは、1848年に完成すると、テュフィアキンの旧宅を横切ったのである。——『大通りの歴史』*Histoire des Boulevards*, ルフーヴ著(1863)]。

この家は、1836年に解体され、その跡地に、1846年、ジュフロワ通りが開通する... ルイ・フィリップの治世の終り頃、アーケード街が流行になる。流行の最初からジュフロワ通りは最も輝かしい成功を取めた。豪華な大邸宅がこの通りを縁どり、その十四の窓は大通りに面して開いていた。この通りには、仕立屋、下着屋、「ピリヤード」のあるカフェ、貸本屋、美容室などが多くのイルミネーションを輝かしていた。

1851年、ここは40万フランの価値のある「金塊」*lingot d'or*を見ようと、野次馬でごったがえしていた。この金塊は大評判になっている宝くじの一等賞で、五千人の労働者をカリフォルニアに無料で移住させるための700万フランの資金を得るためだった。

「金塊」は台座に安置され、その前を敬意を示しながらも騒々しく、群衆が通り過ぎていった... 口やかましい連中は金額の巨大さを絶賛し、紙幣を出したのである。「ユニヴァーサル・バザー」*bazar universel*が広い地下室を使用していたが、現在ではグレ

ヴァン美術館²³)になっていると思う。そして抒情的な小さなカフェが常連客を呼んでいて... ダルシエール²⁴)がその店で歌っていた。

今日ではすっかり忘れ去られてしまった名こそダルシエールである。自分たちの父や祖父が話すのを聞いた人のみが、彼を覚えているのみである。しかしながら、彼は正しく名歌手だった。(図版 E)

今は亡きジョゼフ・ブリュードム²⁵)の言の如く、「彼と知り合いではないが、知っている。」二十年ほど前、美味な夕食の後、何人かの芸術家が素晴らしい思い出を想起しながら煙草をくゆらしていた。ダルシエールの名が会話に出てきたのである... 「なんと、あなたはダルシエールを知らんのですか、とオペラ座の比類なき歌手のフォール²⁶)が突然叫んだ、それじゃあなたは最も偉大な歌手の一人を知らん訳ですぞ... ダルシエール！ なんたる魂！... 私は彼から大きな影響を受けています。彼の弟子ともいえます... ああ！ 彼がピエール・デュボン²⁷)やギュスターヴ・マティユー²⁸)の作品を歌ったのを聞かなかったとは... 「ジャン・レザン」*Jean Raisin*, 「牛の群」*les Bœufs*, 「ルイ金貨」*les Louis d'or*, 「樅の木」*tes Sapins*, 「モーゼル連隊」*le Régiment de la Moselle*, 「さくらんぼ」*les Cerises*... ダルシエールと共にこれらの歌は頌歌のように偉大になったんですぞ！... お判りいたゞけるよう説明しましょう...」とフォールは恍惚とした目つきで、いつものように口の端に煙草をくわえ、一瞬も喫うことをやめず —— 見事な技術なのだが —— 私たちに何時間にもわたってこれらすべての古い唄が如何に感動的で、人間的で、また英雄的であったので、1848年の革命家たちが国立作業場で合唱したのだ、と語ったのである。

ピアノを囲んで聞き惚れ魅了された私たちは、偉大なる芸術家フォールが自分の先生のダルシエールの魂を喚起するのを熱心に聞きいったのである！... そして私たちの一人 —— アルマン・シルヴェストル²⁹)ではなかったろうか？ —— が帰る途中で、故ギュスターヴ・マティユーの詩人的な狂気について語ったのだが、フォールがその「ジャン・レザン」を歌ったばかりだったのである。既に狂人となっていたギュスターヴ・マティユーは、帽子もかぶらず、ポケットにバラの木の若枝をつめこみ、セーヴルやムードン³⁰)の森を駆け廻り、野バラに芽接ぎをしていたのは、後日、恋人たちが自分たちの恋をそれで飾るためであった。(図版 F)

*
**

現在では、多くの定食のレストランがジュフロワ通りで営業している。左側に —— 私が子供だった頃、セラファン劇場が中国の影絵芝居を上演していた場所に〔原注：「音楽と手品の見世物」Spéctacle lyrico-magique がヨーロッパ式のバザールの地下にあったが、今はセラファン劇場になっている（1858）。エティエンヌ・カルジャ³¹）のコミックな石版画が手品師ラファエル・マカルトを描いているが、隅の方に次のような注釈がついている。

「私はわが良き友ラファエル・マカルトを熱烈に推薦する。

「注目すべき知性と大いなる心づかいを有し、高名な技術を持った人物である。

ALP・カール

（ニース、1858年2月12日）]、カフェ・コンセル（音楽の演奏やショーなども楽しめるカフェ）のプティ・カジノが営業している。右側は、有名なグレヴァン美術館の入口が輝いている。（図版G）

私はその回転ドアを押して入る。かくも多くの年月の後に青春のこれらの古き思い出を再発見するのは、なんたる驚きだろう。私は再び見るのである、マルメゾン³²にいるボナパルト、輿に乗られたローマ教皇、マリ・アントワネット、ミラボー³³、キリスト教の殉教者たち、アンリ・ブリソン³⁴、ポール・デルレード³⁵、ルイ17世と鼠たち、さらにまた縞のスカートをつけて微笑しているシャルロット・コルデにざっくりと喉を切り裂かれたあの秀れたマラなどを... 私は悲劇の湯舟、ヴァンヌ³⁶司教区の律義な司祭の手紙が認証している銅製の「浴槽」Sabotを凝視した。私は友人たちにも出会う。メネリク皇帝³⁷の邸で非常に綺麗なカーキ色の衣裳を披露した赤毛のユーグ、『ファウスト』のマルグリットに扮したローズ・カロン嬢³⁸、とても色黒のモーリス・バレス³⁹、大変痩せたフレデリック・マソン⁴⁰、長椅子に坐り、貞奴夫人⁴¹に色目を使っているガブリエル・アノトー⁴²、彼女は日本のサラ・ベルナルだ、怒り狂ったレオン・ボナ⁴³と口論している、とても無愛想なエドワール・ドターユ⁴⁴とすれちがう... そして私がその同じ夕べ、私の極めて親しい大家であり友人であるエドワール・ドターユに私の散歩を話してきかせると、彼は私に彼の「人形」mannequinの冒険を物語ってくれたのである...

「最初のうちは、うまくいきました... 単なる犯罪者のように、写真をとられ、型に

いれられ、徹底的に測定されました。かつら師が私の髪についてメモをとり、髷の金色の具合を調べました。かかりつけのシャツ屋、靴屋はすぐにも寸法をとりにくるつもりでした。私は自分に瓜二つの人形に新しい本当に綺麗な三つ組の背広を提供さえしたのです... 私の目と比べるために、私の前で「瞳の納入業者」fournisseur d'yeux が袋から青い瞳をとりだした時、至極当然ながら驚いたのですが、万事が私を楽しませてくれました！... 最初の不運は美術館の開館の前日の総稽古の日でした。掏摸が私の洋傘を、私のイメージである洋傘を盗んでしまったのです、「私たちの」洋傘を！ その翌日、消えたのは私の「シルク・ハット」huit-neffets だったのです。それらの代わりに、私の盗人たちがどれほどつまぬ雨傘と古くさいシルク・ハットに置きかえたかは、神のみぞ知るです。私はそのため恥をかいてしまったのです。

「つづけてあの三つ組の背広が紛失しました。私の優雅さはみるみるうちに消失してしまいました... 私は要求したのです、私の人形は除去してほしいと。私はチュニジア総督の副官、聖なる役職に就任していたのですから...

「現在では、万事が順調です、美術館の管理が私を回復させました。あなたが御覧の通り... 私はボナと議論しています... しかし私たちは稔りある議論ができるでしょうか?... 私たちは職人たちの技巧を代えねばなりません！」

（続 く）

ジュフロワ・アーケード通り

「パリ歴史散策」(8)

訳 注

1) Passage Jouffroy：第9区にあり、モンマルトル大通りとラ・グランジュ・バトリエール街を結ぶ、長さ140米、幅4mのアーケード街。1845年に造成された時は私道で、1847年に一般に開放されたこの通りは、アガド館の庭園の一部と、この庭園の東側に沿ってモンマルトル大通り10番地に面していた家の跡地に作られた。通りの名ジュフロワは、この通りを完成させた協会長の名である。第一の長いギャラリーを曲ると、数段の階段を降りてヴェルドー・アーケード街（長さ75米、幅3.75米）に繋がっている。ヴェルドーもこの協会の役員の名であった。最初のギャラリーの入口は可成り薄暗い廊下で、バザール・ヨーロッパに通じている。このバザールの地下にセラファン劇場 *théâtre Séraphin* があった。バザールでは後にプチ・カジノ *Petit Casino* が開業した。

2) boulevard Montmartre：第2区と第9区を走る長さ215米、幅35米の大通りで、モンマルトル街とリシュリユー街を結んでいる。この通りは、ルイ13世の城壁の濠跡に造成されたもので、名前は近くのモンマルトル城門からとった。1705年に一応の完成はみたのだが、その後も手入れや補修などが続いた。北側に2列、南側に3列の並木が植樹された。ヴァリエテ座とパノラマ・アーケード街はここにあったモンモランシー・リュクサンブール邸の大庭園の跡地に建設された。6番地にあったカフェ・マドリッドは第2帝政初期に大流行した店で、多くの有名人が常連だった。7番地のヴァリエテ座は、ナポレオンが1806年6月8日付の法令で、劇場整理の対象から除外されて営業を許可された8劇場のなかに入った。但しバレ・ロワイヤルの現場から立ち退きを命じられ、支配人モンタンジェ嬢の苦心の奔走により、この地で興行再開に漕ぎつけたのである。オッフエンバック作『美しきエレヌ』 *la Belle Hélène* をオルタン・シュナイダーが演じて大成功をした。9番地のカフェ・デ・ヴァリエテ、11番地の見世物パノラマ、23番地のダンス・ホール兼レストランのフラスカッティなど、パリ市民を多く誘引した繁華街の一つになった。

3) この邸はロシアの皇族 Tuffakine が所有していたが、後にトルコ大使館になった。作曲家のボワルディユー（1755-1834）が1826年から34年まで住んでいる。同じくロッシェニ（1792-1868）も1829年から33年まで住んでいる。同じ頃にこの隣りのア

パートにイタリア人の作曲家 Carafa de Colobrano (1785-1872) も住んでいた。この建物は 1835 年に取り壊され、その跡地にジュフロワ・アーケード通りが造成されたのである。

4) rue Drouot : 第 9 区にあり、モンマルトル大通りとラ・ファイエット街を結ぶ、長さ 317 米、幅 16 米の道。この道路は、1704 年からリシュリユー街の延長部に命名され、その後も、1847 年、1851 年、1858 年と順次北側に延長され今日に至った。ドルオは Louis Antoine, comte Drouot (1774-1847) で、ナンシー生れの軍人でパン屋の息子だった。メッツ砲兵学校を出て、大革命の戦いに参加、1808 年にナポレオンの近衛部隊長に任命され、ナポレオンと共にエルバ島に行き、島の総督になった。ワートルローで勇戦し、1816 年の軍事法廷で無罪の判決を受けた後は、引退して静かな余生を送った。

この通りの 1 番地の邸に住んでいたショワズール公の妹グラモン公爵夫人は、恐怖政治の時に処刑されている (1794)。また 2 番地の邸の住人の徴税請負人 Loage は 70 歳だったにも拘らず、他の徴税請負人と同じく処刑されている。6 番地のオニー館は 1746 年から 48 年にかけて徴税請負人のオニーのために建築された豪邸だが、ロベスピエールの失脚後、大革命で親兄弟を処刑された人たちがダンス・パーティーを開き、お互いを慰め合った事から、「犠牲者のダンス・パーティー」bal des Vietimes と呼ばれた。

5) rue de la Grange-Batelière : 第 9 区にあり、フォーブール・モンマルトル街とシヨシャ街を結ぶ長さ 247 米、幅 11.69 米の通り。17 世紀末にはバトリエ街として存在し、1847 年までフォーブール・モンマルトル街とモンマルトル大通りを直角に曲って連絡していた。しかしこの年にこの曲った部分などが分離され、ロッシェニ街とドルオ街が新設されたのである。本文の記述はこの分離が一般に普及していなかったためと推測される。その後、1846 年、1851 年と延長され、現在の姿になった。この通りの 10 番地の邸は株式仲買人タテ家の所有となった。アルフレッド・タテはミュッセの親友で、彼のサロンにはミュッセをはじめユゴー、サント・ブーヴ、アルベール、ジラルダン、アラゴらが参集し、ロマン派セナクルの中心の一つになっていた。

6) François Habeneck (1781-1849) : 北フランスのアルデンヌ県メジエール出身のヴァヨリニストで、音楽学校のコンサート協会長を務める傍ら (1828)、オペラ座のオーケストラの指揮者をしていた。フランス人にベートーヴェンの交響楽を紹介したのも彼である。ヴァヨリン曲も作曲している。

7) Guillaume Tell : ロッシェニ作曲のオペラの主人公。13 世紀末頃、スイスにいた

という伝説的英雄。最初はバラードに歌われていたが、1734年から36年にかけてJ.R.Iselinによって発表されたスイス民謡集の中に収録されている。これを題材にしたシラーの創作で、この英雄が広く知られるようになる(1804)。弓の名人ウイリアム・テルが息子の頭にのせたリングを射落すという有名な話はスカンディナヴィアの伝説に起源がある。オーストリーの圧政とその体现者である悪代官ゲスラーの暴虐に敢然と反抗するテルの姿に、パリ市民たちは当時のルイ・フィリップの圧政に対する憤懣を投影し、暴君の最後を夢想したものと思われる。

8) Giacchino Antonio Rossini (1792-1868) : イタリアのオペラ作曲家。父母も音楽家だったが、下積みの人だった。彼は天賦の才に恵まれ、ポローニャでの学業を半ばで放棄、18歳から作曲に専心、1813年に『タンクレディ』*Tancredi* をヴェネチアで発表し、最初の成功を得て、ナポリのサン・カルロ座の音楽指揮者に任ぜられた。1816年ローマのアルジャンティーノ座で上演した『セヴィーリヤの理髪師』*Il Barbier de Sevilla* は、初日こそ大失敗だったが、翌日からは大成功をおさめた。その後、『オセロ』*Othello* (1816)、『シンデレラ』*Cendrillon* (1817)などを発表、次第に名声が上がり、ロンドン次にパリに招待され(1823)、その後はパリに定住した。イタリア座支配人、王立音楽学校総監督に任命される。1829年8月3日、シラーの原作をオペラ化した『ウイリアム・テル』をパリ・オペラ座で初演、大成功をおさめた。彼はこの傑作を最後に39年間に及んだオペラ創作をやめてしまう。ポローニャ、フィレンツェと移住した後、再びパリに帰り、パッシーの自宅で歿した(1868.11.13)。彼のオペラは精緻な技巧と天才的なメロディーで青春の明朗闊達な感情を爽快に歌いあげ、今日でも絶大な人気を保っている。

9) Pesaro : ロッシーニの生れ故郷の港湾都市。アドリア海に注ぐフォグア川の河口にあり、現在の人口は75,000人。海水浴場でも知られるが、15世紀以降はマジオリカ焼の産地として有名。

10) Dabadie (1798頃-1856) : フランスの歌手。1818年に音楽学校に入学、『ヴェスタの巫女』*la Vesta* のシンナ役でオペラ座でデビューした。1821年には退職したラヤに代り主役を務めるようになる。1836年にオペラ座を辞してイタリアに行き、数年間を幾つかの劇場で出演した。ウイリアム・テル、オーベール作の『惚れ薬』*le Philtre* の警官役を得意とした。脂ぎって肥満になってしまった彼の晩年は余り良い役もこなかった。妻のルイーズはオペラ座の同僚で歌手だった。

11) Adolphe Nourrit (1802-1839) : 父も有名なテノール歌手ルイ・ヌーリ (1780-1831) である。父はアドルフを名門校サント・バルブ校に送り、彼はそこで真面目に文学を研究したが、音楽家としての天性が、父の跡を継がせた。父に劣らぬ新鮮で純粹で優雅な彼のテノールは、1826年にオペラ座の第一テノール歌手として父の後を継ぐのである。1821年9月1日、グルック作の『タウルスのイフィゲニア』*Iphigénie de Tauride*の脇役ピラードでオペラ座にデビューした。得意の役は『ウィリアム・テル』のアルノルド、『悪魔のロベール』*Robert le diable*のロベール役などである。デュプレがデビューした後の1837年にオペラ座を退職、ナポリで歌手活動を再開しようとしたが果せず、宿泊先のホテルで投身自殺をした。

12) Nicolas Prosper Levasseur (1791-1871) : パリ北方オワーズ県ブレールの出身。農民の子だったが、天性の美声とその音感が、たまたま村を通りかかった観光客の耳にふれ、この少年を歌手として育成すべく、パリに連れて帰り、1807年の年末に音楽学校に入学させた、という挿話がある。彼は抒情悲劇で一等賞をとり(1812)、翌13年に『キャラヴァン』*la Caravane*でオペラ座にデビューした。その後ロンドンやミラノに巡演、帰国後イタリア座に入り活動したが余りぱっとしなかった。彼が名声をつかむのはロッシーニに見い出され、彼の『コリント包囲戦』*Siège de Corinthe*に出演した時である。かくて有名なトリオ、ヌーリ、ファルコン、ルヴァスールが結成される。『オリ伯爵』*Le Comte Ory* (1828)、『ウィリアム・テル』(1829)、『惚れ葉』(1831)などで、ルヴァスールは天性の技巧と美声で聴衆を魅了した。次に『悪魔のロベール』のパートラム役で大成功をおさめる。1841年に音楽学校教授に任命され、舞台から完全に引退する1852年まで教鞭をとった。晩年は主にドイツで過した。

13) la cantate : イタリア語でcantata。歌曲又は歌謡曲と訳されるが、前者は宗教音楽、後者は世俗音楽の時の訳語というべきか。ルネサンス時代のイタリアのマドリガルから派生した。歌謡曲としてのカンタータは、17世紀から18世紀のドイツで盛んに作曲された。フランスでは、1690年から1750年にかけて愛好され、その後は神話をテーマにしたオペラや牧歌的オペラに転生した。

宗教音楽の歌曲としてのカンタータはドイツで大成功をおさめるが、バッハ以降は衰微してしまう。19世紀になると時局を歌う歌謡曲として、ロマン派や近代派の作曲家たちに愛好され、ローマ賞をかけたコンクールも開催された。

14) Hôtel Crozat : この名で呼ばれている館はパリに3軒ある。最初の建物は、第1

区のヴァンドーム広場 17 番地にある。1702 年に建築家ビュレによって建てられたこの館は、1719 年にシャテル侯爵アントワヌ・クロザ (1655-1738) が購入、それ以来、クロザ館と呼ばれるようになった。彼は新大陸アメリカでフランス領としてルイジアナ州を創設、この地の商業貿易の独占権を国王から授与され、巨万の富を築いた。彼は自費でサン・カンタン運河を建設し、交通運送の便を国家に提供している。この館は彼の死後次男のジョゼフ・アントワヌ、パリ高等法院首席判事に贈与された。

第二のクロザ館は、第 1 区と第 2 区にまたがるリシュリュエ街 (長さ 990 米、最小幅 12 米) の 91 番から 92 番地にかけ、1706 年に建築家カルトールによりアントワヌの弟ピエール・クロザ (1661-1740) のために建造された。彼は絵画の愛好家で、ワトールのパトロンであった。彼のコレクションはロシアのエカテリーナ 2 世が購入し、現在はエルミタージュ美術館にある。この邸は彼の死後、次女に譲渡されるが、彼女が未来のショワズール公夫人である。この建物と土地は 1782 年に競売され、その時に建物は取り壊された。

第三のクロザ館は第 2 区のボワルディユー広場にあり、1706 年頃、建築家カルトールによりピエール・クロザのために建造された。ピエールは「貧乏人」le Pauvre と呼ばれていたが、これは兄アントワヌとの比較で、パリ市民が冗談にしていたまでである。彼も莫大な富を持っていた。その入口はリシュリュエ街の 91 番地から 93 番地に面し、広さはモンマルトル大通りに達していた。この邸宅は当時建築されていたリシュリュエやマザランの邸宅に見劣りする事のない宮殿といつてよい豪邸だった。クロザは、1709 年に大通りの向い側に野菜畠を買い増している。彼はこの館に画家のワトールを滞在させていた (1715)。彼の死後、甥のシャテル侯爵ルイ・クロザに譲渡されるが、ルイは後にこの館をピエール・クロザの次女リーズ・オノリーヌに譲っている。彼女は 16 歳で、後にショワズール公爵となるスタンヴィル伯爵と結婚するが (1750)、その時彼は 31 歳だった。従って文中のクロザ館はこの第三のクロザ館といえよう。

15) M^{lle} Mars, 本名は Anne Françoise Hippolyte Boutet (1779-1847) : フランスの名女優。両親とも役者で、彼女は母の芸名をもらい、13 歳の時に子役として初舞台を踏み、1799 年にコメディ・フランセーズに入団、長い間、生娘役を演じていた当代随一の名女優だった。51 歳で、ユゴー作『エルナニ』の女主人公で生娘のドニャ・ソルを演じて大成功を得ている。1841 年に引退した。

16) théâtre des Variétés : 1806 年 6 月 8 日付のナポレオン 1 世の布告により、この劇

場はバレ・ロワイヤルから退去しなければならなくなる。支配人モンタンジェ嬢は、当時パノラマ園と呼ばれていた地所の地主の了承をとり、此処に新劇場を建設する。そこは現在のパリ第2区モンマルトル大通り7番地である。1807年6月24日の柿落しで、Desaugier作のヴォードヴィル *le Panorama de Momus* で開幕した。座席数1,600で、オーケストラ・ボックス前の最上等席は3.6フラン、階段栈敷の最後列の席は1.25フランだった。最初はドタバタ喜劇を売り物にしていた。1829年以降、真面目な芝居を上演しようと方向転換をはかったが、デュマ・ペールの『キーン』*Kean* (1836.8.31.初演) が成功したにすぎなかった。

そこでまた元に戻り、気のきいた軽喜劇を専門にし、Jenny Vertpréなどが人気を得た。この劇場が繁昌したのは、オッフェンバックのオペレッタを上演してからである。オルタンス・シュナイダー主演の『美しきエレース』は大成功を博したが（1864年12月13日初演）、それにまさる大好評を得たのが、パリ万博が開催された1867年に上演された『ジュロルシュタイン大公妃』である。主演女優オルタンスの楽屋には、万博見物でパリを訪れた各国の元首たちが立ち寄り、賞賛と花束と贈物で彼女を包み込んだという。この後も名優が多数出演し、ナポレオン1世、ルイ18世、シャルル10世、ルイ・フィリップらの君主も来場し観劇を楽しんでいる。

17) Brunet, 本名Jean-Joseph Mira (1766-1851)：パリ生れの喜劇役者、名女形。父は中央市場近くで宝くじの売店を出していた。彼の子供たちは同じ寄宿学校に入っていたが、将来は舞台に立つ事を夢みていた。1790年の法令で宝くじが禁止され、ブリュネは役者で生きようと決心する。ルアンで2年ほど舞台に立ってから、パリのシテ劇場、ついでバレ・ロワイヤルのモンタンジェ嬢の劇場モンタンジュ・ホールに移ったが、この劇場が近くのコメディイ・フランセーズのフランス座の公演を邪魔するとの口実で、立退きを迫られ、前述の如く、ヴァリエテ座を新築して移転した。ブリュネはシテ劇場に出演し、ヴァリエテ座が完成するとそちらに移り、この劇場の創立者の一人となった。彼の名演は多くの最良客を誘引し、「ヴァリエテ座に行こう、いやブリュネの家に行こう」とまで言わしめたのである。彼は50歳近くになってもシンデレラなどの女役を見事に演じたといわれる。どんな役を演じて、その役の人物の本領を舞台に出現させた。完璧な自然さで人物の真実を演じきった名優として、当時の第一人者だった。彼は舞台から見物に来た君主たちを観察して言っている。ナポレオンはあまり笑わず、ルイ18世は大笑いし、シャルル10世は微笑し、ルイ・フィリップは爆笑したと。

18) Etienne Arnal (1794-1872) : ムラン生れの喜劇役者。14歳の時に国民衛兵の少年隊に入隊、ナポレオン1世のフランス戦役に参加、パリ防衛に当たったが、1814年の敗北で軍人としての経歴は終わってしまう。王政復古時代にボタン製造工として働いたが、演劇に魅了され、最初は悲劇役者たらしめたが、悲劇の人物を演じているうちに、自分の本領は人を笑わす喜劇役者にあると悟る。1817年ヴァリエテ座に入り、10年ほど務めたが芽が出ず、ヴォードヴィル座に移った(1827)。彼はデュベールとローザンスという良き同僚に恵まれ、当時フランスで流行していたイタリヤの昔のファルスを演じ大好評を得た。

アルナルは黒衣のジルに扮した。彼はその後ジムナズ座にかわり、次にまたヴォードヴィル座、ついでヴァリエテ座に復帰した。彼はモノローグに独創性を発揮、あまり役柄は多くなかったが、その一語、一つの動作で、笑いを誘い、喜劇的に役を浮彫りにした。頓間な亭主ジョクリスを再生した、といわれる。18世紀の劇作家ドルヴィニエ作の劇『ジョクリスの絶望』*le Désespoir de Jocrisse*で、一杯くわさてだまされる間抜けな亭主を指すようになった。

19) Guilia Grisi (1811-1869) : ミラノ生れの歌手。父はナポレオン軍旗下のイタリヤ人士官。姉 Giuditte (1805-1840) もまた歌手で、後にバルニ伯夫人となった。彼女は姉と同じくその才能により幼少の時からミラノの音楽学校に入学を許された。音楽教育の仕上げはボローニャで、この地の舞台でデビュー(1828)、ロッシーニの *Zelmira* に出演した。この時、彼女は17歳だった。彫像のような美貌、豊かな声量、悲劇女優としての天賦の才が注目され、将来の大成を予感させるものだった。フィレンツェ、次にローマのスカラ座での *Norma* の上演で成功、1822年にパリのイタリヤ座に招かれ、10月16日、姉と共に *Sémiramide* でデビューし、成功を得た。これ以後、彼女はパリに定住する。彼女の当り役は、アンナ・ボレナ、『ドン・パスカレ』のラ・ノリナ、『セヴィーリヤの理髪師』のロジーナ、ジュリエットなどだが、姉 Giuditte はロメオを得意としていた。晩年は人気落ちかけたが、渾身の力をふりしぼって熟演、声の衰えを悲劇女優の演技力でカバーし、聴衆を感動させた。

20) Jean-Baptiste-Alphonse Karr (1808-1899) : 19歳でブルボン高等中学の教師になるが、教師生活になじめず、閑暇のうちに人生を送る事を夢想した。この生活からの脱出をめざし、1832年『菩提樹の下にて』*Sous les tilleuls* を発表し好評を得、この縁で「フィガロ」紙 *Le Figaro* に入社、1839年には編集長になった。この間にも創作を続け、

『金曜日の夜』 *Vendredi soir* (1835), 『ジュヌヴィエーヴ』 *Geneviève* (1838)などを発表して人気作家となり、駅のキオスクでのベスト・セラー作家になった。しかしこれらはすべて駄作で文学的価値は無い。彼の真価は、1839年に創作した月刊（後に不定期になる）の小冊子『蜂』 *Les Guêpes* で、政財界の大物や、文壇、画壇、音楽界などの有名人や有力者を独得の諷刺をきかせた皮肉な文章で槍玉にあげ、この小冊子の洛陽の紙価を高めたことにある（1839-49）。田園生活を愛していた彼は、ノルマンディーのサント・アドレスに別荘を購入、ボート遊びや魚釣りを楽しみ、実際に蜜蜂も飼っていた。1851年12月2日のルイ・ナポレオンのクー・デタに反対し、ニースに移住し、ここでもサント・アドレスでの生活を再現した。『農園通信』 *Lettres écrites de mon jardin* (1853), 『海辺にて』 *Livre de bord* (1878-80), 『川釣りりと海釣りり』 *Pêche en eau douce et en eau salée* (1885)などを発表し、亡命志願者の優雅な余生を語っている。彼はノルマンディーに移転する前は、当時は田舎だったパリ郊外のモンマルトルやサン・トゥアンで暫く暮らしていた。

21) Albert Grisar (1808-1869) : アンペール生れのベルギー人の作曲家。パリで音楽教育を受けていたが、1830年の革命のため実家が破産し、中途退学しなければならなかった。生活のため数篇のロマンスを作曲したが、そのうちの一篇が名テノールのヌーリの絶唱により、彼は幸運にも人気作曲家となった。彼はすぐ後にオペラ・コミックに編曲したヴォードヴィル『出来ない結婚』 *Mariage impossible* を、1833年にブリッセルで上演し大成功を博し、ベルギー政府から1,200フランの年金を下賜された。パリに帰った彼は数曲のロマンスを作曲し、優雅で親しみやすい才能を示した。更にオペラ・コミック座で『サラ』 *Sarah* (1836), 『紀元千年』 *An mille* (1837)を上演、一流作曲家への道を着実に歩み始めた。しかし彼は自分の音楽教育の未完による知識の不充分さを自覚していたので、ナポリに赴き、メルカダントに就いて、作曲法などを学んでいる。この努力の甲斐があって、パリに帰って発表した *Porcherons* (1850)は、優雅さと明晰さが競い合った傑作となった。創意工夫に富んでかつ繊細な作曲家としてグリザールは多くの作品を世に送った。代表作は『今晚は、パンタロンさん』 *Bonsoir, monsieur Pantalon* (1852), 『素敵な雌猫』 *Chatte merveilleuse* (1863)などである。

22) François Adrien Boieldieu (1775-1834) : フランスの作曲家。故郷ルアンでオルガニストとして活動、最初の歌劇2篇（1793, 95.）は好評だった。パリに上京、オペラ・コミックを發表、特に「バクダッドのカリフ」 *La Calife de Bagdad* (1800)は大好

評だった。家庭の不幸からパリを去り（1803）、ロシアに行き、アレクサンドル皇帝から王室礼拝堂監督に任じられ、またベテルブルクの王立歌劇団も指揮した（1803-10）。1812年に帰国、パリ音楽学校の作曲科教授となり、ロマン主義の先駆的作品「白姫」*Dame blanche*（1825）を世に送った。

23) Musée Grévin：グレヴァン蠟人形館。第10区のモンマルトル大通りの10番地に、クレヴァンによって1882年に創設された。歴史的場面やマジックミラー、手品師のいる幻想室などがある。政治、芸術、スポーツなど各界の偉人、有名人の等身大の蠟人形が展示されている。学校の休校日に開館。なほ第1区のホーラム・デ・アールに新館が開設されている。ここではユゴーやロートレック、ジュール・ヴェルヌ、エッフェル塔やその建設者のエッフェルなど主として19世紀後半のベル・エポック時代の人物などが展示されている。

創設者のAlfred Grévin（1827-1892）は有名な戯画作家で、「愉快新聞」*le Journal amusant*に毎週パリ市民の典型的な人物のかりかちュアを発表していた。またエルネスト・デルヴィリーと共作で三幕物の劇作*le Bonhomme Misère*を1877年にオデオン座で上演、まずまずの成功を得た。またユアールと共同で『パリの女性たち』*les Parisiennes*という一種のアルバムを発表したが、これは彼が新聞紙上に発表したかりかちュアの傑作集である。しかし彼の名声を確実にした事は、前記のグレヴァン美術館の創設であった。

24) Darcier, 本名Joseph Lemaire（1820-1883）：パリ生れの歌手、作曲家。姉クレマンティーヌ（1818-1870）も歌手だった。彼の最後のシャンソンは『サン・ジャック塔』*Le Tour Saint-Jacques*だった。1880年にゲーテ座で、人々は慈善公演を行い、その利益金により、ダシエールは晩年を平和に暮せた。彼は何人かの有名な歌手、ルメール、イスマエル、リオネ兄弟、テレサなどを育成している。

25) Joseph Prudhomme：作家アンリ・モニエ（1805-1877）が創作した作中人物で、愚鈍なブルジョワの典型。太鼓腹をつきだしてふんぞり返り、薄くなった髪をびったりなでつけ、鼻眼鏡に燕尾服、編み上げ靴をはき、空疎な大言壮語を全く反省もなく喋りまくる俗物である。

26) Joseph Baptiste Faure（1830-1914）：中部フランスのアリエール県の県都ムランの生れ。早くからパリに上京、マドレーヌ寺院の聖歌隊に採用され、1843年から5年まで音楽学校の授業をうけることができた。卒業して、変声期の間は、生活のためダ

ンス・ホールでコントラバスを演奏していた。変声期が終ったある朝、彼は自分の声が従来のボーイ・ソプラノから見事なバリトンになっている事を発見したのである。歌手としてのデビューは、1852年10月20日、オペラ・コミック座の「ラ・ガラテ」*la Galatée*（ヴィクトール・マセ作曲）のピグマリオンの役だった。その後次第に注目されるようになり、1858年の「カンタン・ダワード」*Quentin Durward*（M.ジヴァエール作曲）や、「プロエルメル」の許し *Pardon de Ploérmel*（1859年、メイエルベール作曲）で成功した。しかし彼は本格的な歌手としての成功を狙ってオペラ座の桧舞台に立った。1861年10月14日、ポニアトウスキー作の「ピエール・ド・メディシス」*Pierre de Médicis*のジュリアン役でデビューし、聴衆の拍手で迎えられた。その後は順調に成功をかさねヨーロッパ随一のバリトン歌手となった。ロッシーニ作「モーゼ」*Moïse*、ヴェルディ作曲「ドン・カルロス」*Don Carlos*などが彼の当り役であった。1857年3月、音楽学校の歌曲教授に任命されている。

27) Pierre Dupont (1821-1870)：リヨン郊外に生れたシャンソン作曲家兼歌手、詩人。母を幼少の時になくし、名付け親の司祭に育てられた。彼はデュポンを聖職者にしようとしてラルジャンティエール神学校に送った。しかしデュポンはここを出て、リヨンで絹織工場の職人、ついで銀行員となった。祖父の家で詩人のピエール・ルブランを知り、ルブランは彼を文学の道に先導したのである。彼は既に書き上げていた『二人の天使』*Les Deux Anges*をルブランに読んできかせた。ルブランはこの作品の素晴らしさに感動、予約購読を募集し、この予約金でデュポンはこの作品を出版することができた(1842)。アカデミーも注目し文学賞を与えたこの歌曲で、デュポンは一躍して有名作家になった。彼はアカデミーの辞書編集の助手に採用される。しかしペン一本で生活できる自信がついた時、彼はこの職を辞し、創作に専念するのである。新鮮な独創性、素朴な田園感情に溢れた彼の作品「牛の群」「若い母」「葡萄園」など、すぐに人々の愛唱する所となった(1845-46)。デュポンはまた社会の現実、労働者たちの悲な生活を歌った政治的哲学的作品も多くあり、これらは政治歌曲 *chansons politiques*として分類される。1851年のルイ・ナポレオンのクー・デタを目撃したデュポンは、共和主義的、社会主義的な政治作品を公表するのを避けるようになり、半分引退のような生活に入る。この間に「さまよえるユダヤ人の伝説」*Légende de Juif errant*を創作している。彼の作品は『歌曲とシャンソン』*Chants Chansons*として集大成された(1852-54)。

28) Hugues Antoine Gustave Mathieu (1808-1877)：フランス中部ニエーヴル県の県

都ヌヴェール生れの詩人、シャンソン作家。ブルジョワジーの旧家の生れで、故郷で充分な教育を受けたが、冒険好きの熱血漢だった彼は、20歳の時にル・アーヴルで船員となり、何度も世界一周をし、最後には太平洋でコルセール船の船長を務めた。帰国後は画商となり、商売のかたわら創作にあたり、「大きな沼」*Grand étang*の伝説を歌ったシャンソンで有名になった。続いて発表した『牧人と粉ひき女』*le Père et la Meunière*、『ボヘミアン』*la Bohémien*、『ジャン・ラザン』*Jean Rasin*などで、名声を不動のものにした。彼はこの間に評論家で詩人のオーギュスト・リュシェ（1809-1872）と知り合った。マティユの熱烈なファンだったリュシェのおかげで、彼はランスの大商社のパリ代理人になり、パリ市民に自分の歌で有名にしたワインを提供し続ける。「ジャン・ラザン」紙（後に年鑑）を発行、リュシェがその紙上に陽気なユーモア溢れる記事を発表した。彼もこの紙上に『雄鶏の唄』*le Chant de coq*を発表するが、この作品は情景描写と祖国愛の傑作である。1872年にこれまでの作品を編集して出版、その後はフォンテーヌブローの森の一角に隠退した。

29) Paul Armand Silvestre (1837-1901)：パリ生れの文学者。法曹家の父は彼に法律を学ばせようとしたが、彼はエコール・ポリテクニクに入学、1859年に卒業と同時に士官となるが、戦闘に従事したのは1870年から71年の間のみで、後は創作に専念した。1869年に財務省に入省、1892年には美術監察官となった。処女詩集『今古調』*Rimes neuves et vieilles*（1866）は、ジョルジュ・サンドの序文付きだった。彼はその後も何冊かの詩集を発表、1866年から71年にかけて詩の全集を刊行した。シルヴェストルはまた「ジル・プラス」紙をはじめ多くの新聞雑誌に美術評論や文学批評を発表し、数篇の劇作や喜劇、オペラ台本も書いている。

30) Meudon：パリ南西約10軒にある町で、森の台地の斜面に位置している。ルイ15世の愛人ポンパドゥール夫人が庭園と邸を造営し、国王もしばしば訪れた。1757年、国王は彼女から庭園も邸も買い取り、設備を拡大充実させたので、王女たちも好んで滞在したが、大革命の時に掠奪破壊され、後に国有財産として競売され、昔日の面影は無い。しかし住宅地としては、昔から文人たちに愛好され、ロンサル、アンプロアーズ・パレ、ラプレー、ルソー、バルザック、ワグナー、マネなどが住んだ。現在では国立天文台、モリエールの妻だった女優のアルマンド・ベジャールの邸を含む芸術・美術博物館、ロダン美術館などがあり、学術文化の香気を漂わせている。さらに1,150ヘクタールに及ぶ広大な森林が、起伏に富む大地に広がっており、パリ市民の格好の散歩地になっ

ている。セヌ川のスガン島やサン・ジェルマン島からムードン市街やセヌ川峡谷、さらにパリを遠望できる海拔 153 米の「絶景」Bellevue テラスと共に、このムードンの森のテラスも美しい眺望を与えてくれる。

31) Etienne Carjat (1828-1906)：戯画作家，文学者，写真家。フランス東南部アエン県ヴィルヌーヴ近郊の生れ。最初工業デザイナーとして出発したが，1854 年に戯画に転向、『都会劇場』*Théâtre à la Ville* というリトグラフのシリーズを企画刊行した。有名な俳優や歌手たちが，ヌードで戯画化され，大衆は大いに楽しんだのである。1856 年，シャルル・バターユとアメデ・ロランという若い優秀な協力者を得て，「対話」紙 *le Dialogue* を創刊，この紙上に，文壇，学会，劇壇などの有名人を登場させた。そのうちの傑作肖像はジュール・ジャンン，テオフィル・ゴーチエ，ヴィクトール・ユゴー，ラマルティエス，ティエール，ロッシニ，ベルリオーズ，ヴェルディ，オッフエンバック，ドーミエ，フレデリック・ルメートルなどなどであった。その他，世情の些事，事件，挿話などが描かれ，当時の社会を知る貴重な風俗資料となっている。また写真でも優秀な技術家で，多くの写真展で受賞，1861 年のロンドン，1862 年のベルリン，1863 年，1864 年のパリ，1867 年の万博で受賞している。

32) 正確には Rueil-Malmaison：パリ西方オート・セヌ県ナンテール郡の郡庁所在地で，現在の人口は約 63,000 人。国立博物館とジョゼフィーヌの館がある。17 世紀に建築された邸を気に入って，ジョゼフィーヌは 1799 年に買収し，名建築家のペルシエとフォンテーヌに依頼し翼棟とヴェランダを増築した。第一統領となったナポレオンはしばしばこの邸に宿泊，優雅な魅力をたたえたジョゼフィーヌと過した。600 着の服を持っていたといわれる彼女は，日に何度も着替えたと伝えられる。二人は最も幸福な結婚生活をこの邸で送った。ナポレオンと離婚した（1809）後も，彼女は此処に住み，ここで死去した（1814.5.29.）。セント・ヘレナ島に流される直前，ナポレオンは一人で此処を訪れている（1815.6.29）。この邸はその後多くの人の手に渡ったが，1904 年に国に寄贈された。ナポレオンやジョゼフィーヌ関係の遺品や資料が蒐集され，博物館として 1906 年に開館した。庭園のバラが美しい。

33) Honoré Gabriel Victor Riqueti, comte de Mirabeau (1749-1791)：フィレンツェ出身の南仏の名家で，1685 年に爵位を得た。幼少の頃から抜群の知性と情熱的性格を持つ南仏気質の快男子ならぬ怪男子だった。18 歳で騎兵連隊に入り，コルシカ遠征に参加（1768-70），除隊後クリニャン侯の娘と結婚させられるが，莫大な持参金を放蕩

生活で乱費、息子の不行跡を矯正しようとして、父は息子の拘引状を申請し、彼をイフ島に監禁させた（1774）。翌75年にスイス国境近くのポンタルリエのジュー砦に拘禁されていた時、砦の司令官の妻ソフィー・ド・リュフェ（彼女は後に自殺する）を誘惑して脱走、スイスからアムステルダムに辿りつき、彼はそこの出版社に務め生計をたてた。ブザンソン法廷は欠席裁判により、ミラボーに対して、誘拐と姦通罪で死刑の判決を下した。1777年、犯人引渡しの法により、彼とソフィーは本国に送還され、彼はヴァンセンヌの牢に、彼女は修道院に幽閉された。彼はこの牢に42か月間拘留されるが（1777-80）、この期間に有名な『ソフィーへの手紙』*Lettres à Sophie*（1792年刊行）や、『封印状及び国家刑務所試論』*Essai sur les lettres de cachet et les prisons d'Etat*（1782）などを執筆した。1820年12月、父の許しを得て釈放され、ソフィーと別れ、死刑判決の無効を獲得（1782.9.）、別居中の妻との復縁を要請、その雄弁は法廷を驚した。しかしエクス高等法院は彼の要請を却下したため、生活費を稼がなければならなくなり、文筆生活に入った。父親の横暴の犠牲者としてミラボーは、一般庶民の同情を買って、一種の人気者になった。イギリスに滞在して（1784-85）、議会政治を研究、帰国後はその研究成果をパンフレットとして刊行、政治生活に入った。また政府の密使としてプロシヤに派遣され、フレデリック大王の治政について報告している（『プロイセン王国論』*De la Monarchie prussienne sous le Grand Frédéric*, 1788）。

フランス大革命という彼の活躍の舞台が出現する。三部会の貴族部会に立候補しようとしたが、南部の貴族たちに拒否されたため、彼は第三身分の議員に鞍替え立候補、エクスとマルセーユの2選挙区からトップ当選を果し、第三身分部会のリーダーとして活躍する。彼はイギリスの議会制度とモンテスキューの『法の精神』の三権分立を、フランスにおいて実現する、という明確な政治理想を持っていた。自由を基盤とし、王権は議会を無視せず、議会は王権を否認しない、憲法に基く公正穏健な立憲王政が彼の目標だった。彼は自分の主張を理解してもらおうと宮廷側と接触したが、彼のこのような行為は人民を裏切る反革命的行為だと、反対派から告発される。彼の努力に対し、国王は全くの善意から彼の個人的借財を肩代し、更に年金を支給した事も、彼が国王から買取されたという攻撃の口実となった。しかし彼の人気はこのような非難に対してほとんど無傷だった。立憲王政樹立に向って努力している最中、彼が病歿した時（1791.4.2）、パリ市民たちはこの破天荒な怪男子のために熱い涙を流したのである。

34) Eugène Henri Brisson (1835-1912)：プールジュ出身の政治家。パリで弁護士、

ジャーナリストをした後、1871年の国民議会議員に当選。極左派に属し、パリ・コムユヌ分子の釈放を要求した。何度も下院議長を務め（1881, 1894, 1904, 1906）、また首相になり（1885-86, 1898）、2度目の首相在任中にドレフュス事件の再審を決定し、無罪釈放への道を開いた。しかしこの決定に反対する閣僚たちとの軋轢のため首相を退陣した（1898.10）。彼は第3共和政時代の反教会派のリーダーの一人であった。

35) Paul Déroulède (1846-1914) : パリ生れの政治家、文学者。1870年の普仏戦争に志願兵として参戦、終生ドイツに対し復讐の怨みを持ち続けた。敗戦後に『兵士の歌』*Chants du soldat* (1872)、『行進とラッパ』*Marches et sonneries* (1881)、『武装解除』*Le Desarmement* (1891) など一連の愛国精神を鼓吹する詩を発表し、次に自ら「愛国者同盟」*Ligue des patriotes* を創設（1886-1908）、右派勢力のリーダーとして政界に乱入した。ブーランジェ將軍を支持し、国粹愛国運動と対独復讐戦をさげんだ。急死したフェリックス・フォール大統領の葬儀の翌日（1899.2.23.）、第3共和政打倒のためのクーデタを企てたが失敗、10年間の国外追放処分をうけた（1900）。彼はスペインに亡命したが、1905年の恩赦で帰国、その後も対独復讐戦の準備に晩年を送った。

36) Vannes : フランス西部ブルターニュ半島先端の南側にあるモリビアン県の県庁所在地、人口約193,000人。商工業の中心であり、多くの記念建造物、大聖堂、教会がある。司教区になったのは5世紀の事である。国王フランソワI世の故郷でもある。

37) Ménélik II (1844-1913) : エチオピア帝国の版図を拡大、国民の近代化を進めた皇帝。イタリアの武力を利用して対立していたテオドロス2世を敗死させ、更にヨハネス4世を破り、エチオピア全土を手中にし皇帝に即位した（1889）。1889年5月2日にイタリアと締結したユシアリ Ucciali 条約の解釈を廻ってイタリアと対決、1896年3月1日、アドア Adoua の戦いでイタリア軍を破り、エチオピアの独立を承認させた。彼は貴族の特権や奴隷制を廃止し、公共教育を推進。ジブチ Djibouti とアジス・アベバ間の鉄道建設をフランスに依頼した。病気になった彼は、1909年に孫に皇位を譲ったが、この帝位はタファリの元首 ras のハイレ・セラシエに篡奪されてしまう。

38) Rose Meunier Caron (1857-1930) : パリ生れの歌手。1875年に音楽学校に入学。78年に卒業後、多くのコンサートに出演して成功、ピアノ伴奏者カロンと結婚し、しばらく舞台から遠去かっていた。1882年にブリュッセルで契約し、モノ劇場に出演し成功をおさめた。*Sigurd* のブリュタヒルドが彼女の当り役だった。パリの音楽アカデミー院長が、この役をパリで演じてほしいと提案した時、*Sigurd* の作者 Reyer は、カ

ロン夫人をオペラ座に出演させる事を条件にした。1885年の彼女のオペラ座デビューは大成功で、以後、彼女は抒情的舞台のスターになった。『ファウスト』のマルグリット、『ユグノー』のヴァランティースに扮した彼女は、比類無き純粋さと悲劇女優としての才能を発揮した。1887年12月、オペラ座の支配人の不注意からカロン夫人のコンクール契約が反故になり、怒った彼女はブリュッセルのモネ劇場と出演契約し、パリを立ち去った。この事がヴェルディーに『オテロ』上演を断念させる。彼は彼女しかデスデモナを歌えないから、と断言したのである。カロン夫人は、1886年に離婚していたが、舞台名はそのまま使用した。

39) Auguste Maurice Barrès (1862-1923) : フランス東部ヴォージュ県シャルムの生れ。テースとルナンの影響を受け、20歳でパリに上京、『自我崇拜』*Culte de mois*の題名の下三部作『蛮族の目の下で』*Sous l'oeil des barbares* (1888), 『自由人』*Homme libre* (1889), 『ベレニス の園』*Le Jardin de Bérénice* (1891) を発表し、作家としての地位を固めた。普仏戦争での祖国の敗北と無残に敗走するフランス軍の惨状を目撃した幼年時代の体験が、自我の確立により祖国の独立と民族の誇りを堅持せんという信念を彼に与えたのである。創作活動のかたわら、バレスはデルレードらの主張する国粹主義的運動に共鳴して参加、プーランジェ將軍擁立のリーダーとして活躍、同時に対独復仇の愛国主義者として政界に登場したのである。プーランジェ將軍支持者として、1889年ナンシーから代議士として選出され、一時議席を失うが、パナマ運河疑獄事件、ドレフュス事件など、世紀末の混乱を象徴する大事件に際し、伝統的保守派、右翼陣営の論客として活躍、特にドレフュス事件においては、フランス陸軍の伝統を擁護する立場から愛国者、国粹主義者として反ドレフュス派の指導者になった。1906年にアカデミー・フランセーズの会員となり、同年パリ選出の代議士として終生愛国精神と伝統的フランス精神の堅持を主張した。フランス・ナショナリズムの思想を、創作と政治の両面において実践した先駆的思想家であった。彼は多くの作品を残したが、第一次大戦中に執筆した『大戦通信』*Chronique de la Grande Guerre* (1914-20, 14巻)と、死後出版された『わが手帖』*Mes Cahiers* (14巻)は、バレスの内心の記録として重要である。

40) Frédéric Masson (1847-1923) : パリ生れの歴史家、伝記作家。外務省図書館長として勤務のかたわら、利用できる膨大な資料を参照し、主としてナポレオン関係の著作を発表した。代表作は『ナポレオンとその家族』*Napoléon et sa famille* (1897-1991, 全13巻)である。その他『ナポレオンと女性たち』*Napoléon et les femmes* (1893), 『離

婚されたジョゼフィーヌ』*Joséphine répudiée*（1901）などがある。1903年アカデミー・フランセーズ会員となり、1914年には終身書記に選出された。

41) 川上貞奴（1871-1946）：女優，本名小熊貞。川上音次郎（1864-1911）の妻で欧州を巡業した最初の日本人女優。帝国女優養成所，川上児童劇団を創設，後進の育成に務めた。彼女は特にパリで大人気で，社交界や政・財界の大物たちが彼女のファンになった。

42) Albert Auguste Gabriel Hanotaux（1853-1944）：北仏エーヌ県ポールヴォワール出身の政治家，歴史家。1879年に外務省に入省。ガンベッタやフェリー内閣の官房長官を務め，次にメリーヌ内閣で外相となった（1896.4.-1898.6.）。仏露同盟成立に努力，ニコラス2世のパリ訪問を実現した（1897.10.）。またチュニジア，アフリカ，アジアにおけるフランスの権益の確保に貢献した。ヨーロッパではドイツとの和解を推進した。1898年に退職した。この間彼は著述に専念，多くの歴史書を書いた。代表作は『リシュリユー枢機卿伝』*Histoire du cardinal de Richelieu*（1893-1947），『現代フランス史』*Histoire de la France contemporaine*（1903-08）など。1897年にアカデミー・フランセーズ入り。

43) Léon Bonnat（1833-1922）：バイヨンヌ生れの画家，デッサン画家。初めマドリッドで，次にパリで画を学び，最初は宗教画を描いていたが，後に肖像画家に転じ，第三共和政時代の有名人の多くの肖像画を創作した。ティエール，ジュール・フェリー，ユゴー，ルナン，パストゥール，テースなどである。彼はクールベの写実主義の伝統を守り，アカデミックな手法で微細な描写を得意とした。彼は多くの見事なデッサン画の蒐集を国家に寄贈した。故郷のバイヨンヌには彼の名を冠したボナ美術館がある。

44) Edouard Detaille（1848-1912）：パリ生れの戦争画家。メソニエに学び，特に戦争画を描いた。英雄的感傷の場면을微細かつ正確に描いて，臨場感を表現した。代表作は「レズーヴィルの夕べ」*Soir de Rezouville*（1884），「夢」*Le Rêve*（1888）。彼はまた優秀な挿絵画家でもあり，代表作は「フランス軍」*L'Armée française*（1883, A.de.Neuville 作）。



G. ROSSINI VERS 1829.

(図版A)

1829年頃のロッシェニ



LE BOULEVARD MONTMARTRE VERS 1845.

Becquet frères, litho

(図版B) 1845年頃のモンマルトル大通り



F. HABENECK.
L. Massard, del. et sculp.

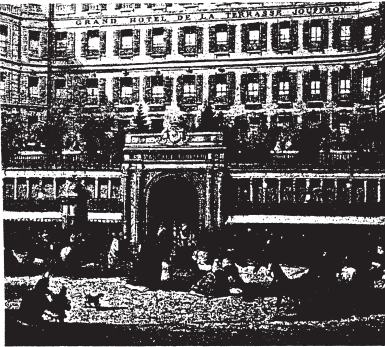
(図版C) アバネック氏



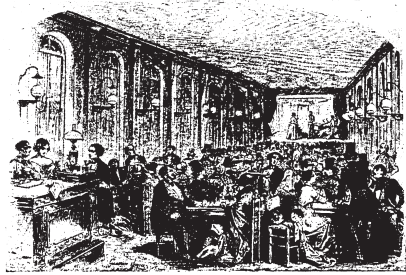
ENTRÉE DE L'HÔTEL AGUADO.
Actuellement Mairie, rue Drouot.

M•L.Pannier, sc.

(図版D) アガド邸の入口



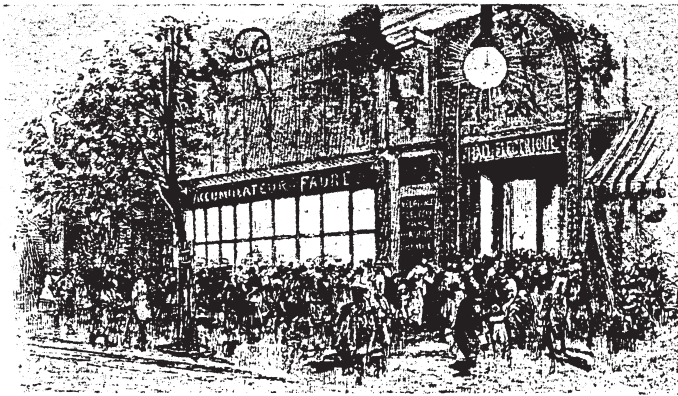
LE PASSAGE JOUFFROY VERS 1869.
Rivière, lith.



L'ESTAMINET LYRIQUE AU PASSAGE JOUFFROY.

(図版E) 1869年頃のジョフロワ街

(図版F) ジョフロワ街のカフェ



BOULEVARD MONTMARTRE.

A. Lepère, *del. et sc.*

(図版G) モンマルトル大通り

(追 記)

- (1) 本稿は、Georges Cain 著 *Le long des Rues* (Flammarion 社、1912 年刊) から、訳者の興味をそそった章を訳したものである。原題の意味は、「通りに沿って」、であるが、パリの歴史に言及している箇所が多いので、「パリ歴史散策」と意識してみた。テキストをよりよく鑑賞する一助として、人名、地名などの解説として、訳注を補足してある。お役に立てば幸甚である。
- (2) 翻訳にあたり、主として利用させていただいた文献のみ記し、謝意を表したい。
- イ) 「十九世紀ラルース大辞典」
 - ロ) 「岩波西洋人名辞典」
 - ハ) 「世界美術辞典」(新潮社、昭和 60 年刊)
 - ニ) 「フランス文学辞典」(白水社、1974 年刊)
 - ホ) 北島広敏著「パリの橋」(グラフ社、昭和 59 年刊)
 - ヘ) J-P.Clébert : *Les Hautes lieux de la littérature française*, (Bordas 社、1992 年刊)
 - ト) J.Hillariet : *Connaissance de vieux Paris*. (Princesse 社、1954 年刊)
 - チ) J.Hillariet : *Dictionnaire historique des rues de Paris* (Minuit 社、1985 年刊、2 巻)
 - リ) Félix et Louis Lagare : *Dictionnaire administratif et historique des rues et monuments de Paris* (Maisonneuve et Larose 社、1994 新刊)
 - ス) 村松嘉津著「巴里文学散歩」(白水社、1958 年刊、2 巻)
 - ル) 宇田英男著「誰がパリをつくったか」(朝日新聞社、1994 年刊)
 - オ) ミシュラン社編「パリ」(実業之日本社、1991 年刊)
 - ワ) 河盛好蔵著「パリ物語」(角川書店、昭和 34 年刊)
 - カ) 新倉俊一他共著「事典・現代のフランス」(大修館書店、1977 年刊)
- (3) 前号に校正ミスがありました。下線のように訂正して下さい。
- p. 14. 下から 2 行目 クリュニー教会